



### 香りの小部屋



◀ジャングルの白檀木

も注意をうけるらしい。やっと案内人を一人つけてくれ、二〇kmほど離れた森林保護区の中にある白檀の群生地に案内してくれた。車で四一五〇〇mほど山を上ると、白い花の咲いた木が群生していた。案内人はこれも白檀だと言う。白檀に白い花があるのは驚いた。十五年以上も経った木は実をつけるような花を咲かせず、小さな白い花のようなものが咲くとの事。下の谷には直径三〇cm以上はある白檀が一面に生えている。盗まれずに残っているのは州政府によって厳重な警備のもと保護されているからだ。

バンガロールに戻り、白檀輸出業者から短い時間だったが、最新の情報をもらい、



**白檀の聖地を訪ねて**  
バンガロール・マイソールへの旅

梅栄堂 営業本部長  
中田 恭三朗

インドでは白檀を専門に盗む盗賊グループがある。中でもその中心

南インドでは有名な人で、すでに十数年にわたり警察・軍隊から逃げ回り、ジャングルの中で生活していた。貧しい村人にはお金を分け与え、現代版ロビンフッドとして慕われていたが、ついに最近、警察との戦闘で射殺されたと聞いた。

●

盆休みを利用して久しぶりに息子と南インドへ出かけた。白檀の状況調査の旅である。まずはバンガロールにある

銀行の庭に白檀木を見に行く。しかし、残念ながら一ヶ月前に根本から切り倒され盗まれたと、直径約三〇cmはありそうな、残された根株を見せてくれる。最近生産された白檀の半分以上が盗伐され、闇のルートで海外に持ち出されていると云われている。白檀の値段が高騰しているのも、こうしたことが一因であると思われる。

その後、国立の樹木科学研究所を訪問。白檀の植林事業について大変詳しい人から話を聞く事が出来た。本格的な植林事業で生産・出荷された白檀はまだ少なく実験段階である。木の伐採は必ず州政府の手で行う。盗伐が横行していたが、最近警察の取締りも厳しくなり、白檀を扱う条件が良くなったので栽培する農家も増えて来た。今後白檀の生産量は増える見込みだが、世界中からの需要が供給の十倍以上あり、価格はまた上がり続けるだろうとの事。

空港へ急ぐ。コーチン行きは便は双発のプロペラ機ですでに満席。一時間二十分の飛行だが、我々が最後の客であった。コーチンは海のシルクロードの中継地として古くから栄え、香辛料の街としても知られている。

ユダヤ教会の壁には、紀元前に初めてユダヤ人がコーチンにやって来た時のことが描かれている。そして、ある絵の下には、「この地が『Oud Ivory, Cheek Spice』の国と呼ばれていたと書かれていた。アラビア語でOudは沈香のことである。香道で六国のひとつ、真那置は、コーチンのあるマナバル海岸辺りで取れた沈香であると云われているが、今までどう考えても沈香と結びつかなかったが、この地方が紀元前からOudの国と呼ばれていた事がバイブルにも記載されている。

長年の疑問がこれで解けた。息子が体調を崩し手持ちの薬では効かず、インドの薬を飲ませる。インドで罹った

次に訪れたマイソールの郊外では、自生白檀をいくつも見る事が出来た。花が咲き、熟した赤い実もなっていた。これを乾燥させて皮を剥くと中から種が出てくる。この白檀の実をたくさん集め、日本への土産にした。デカン高原にあるマイソールは八月とはいえ、早朝は冷え込み、ホテルのドアボーイは厚手のジャンパーにマフラーをしている。マイソールの二二〇km西にあるバンデイプール国立公園へ行く。しかし、前回訪問時にあった管理事務所の横の大きな数本の白檀の木は、やはり盗まれて姿を消していた。管理事務所の役人に白檀を見たいと申し出るが、なかなかOKを出してくれない。盗伐への警戒は厳しく、最近では車を道路わきに停車するだけで

病気はインドの薬が効くとの事。物の見事にすぐに効果が出た。マキケットには香辛料の店が並び、丁子、大茴香、桂皮、胡椒、唐辛子、ナツメグなど、梅栄堂で使っている原料も山積みされている。トリヴァンドラムへは椰子林の続く海岸線を南下して列車の旅。アラビア海に面したリゾートホテルに宿泊。移動に疲れたらしい旅行であったが、最後にのんびりと体を休める事が出来た。インド最南端のコモリン岬に夕日を眺めに行き、ムンバイ経由でデリーへ戻る。トリヴァンドラムからデリーまで飛行時間だけでも四時間、インドが広大である事が実感できた。今回もインド人の名ガイド、カーナ氏のお陰で予定通り無事旅を終えることが出来た。(終り)



◀丁子・桂皮・大茴香等が並ぶコーチンの香辛料市場

ヒンズー教の祭り▶

